

Kwacha(クワチャ)はチェワ語で「夜明け」を意味します。

編集・発行：日本マラウイ協会
〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-2-24 青年海外協力協会気付
Tel. 03-3447-2921 Fax. 03-5798-4269
Home Page <http://www.joca.or.jp/malaw/malawi-j.htm>
E-mail japan-malawi@mc.neweb.ne.jp

面積：118,484 平方 km (日本の約 1/3)

人口：1080 万人 (1999 年推計) 首都：リロンゲウエ

独立：1964 年 7 月 6 日、公用語：英語、チェワ語

政体：共和制、大統領：バキリ・ムルジ

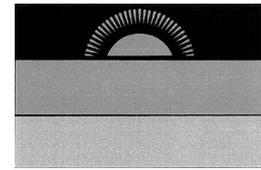
為替レート：US\$1 = MK 74.297 (3 月 1 日現在)

MK 1 = 1.9098 円 (3 月 1 日現在)

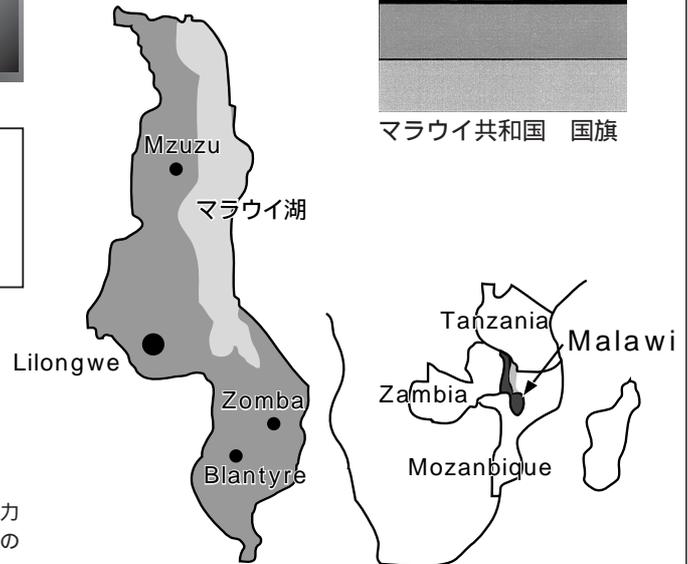
【日本マラウイ協会 (Malawi Society of Japan)】

日本とマラウイ両国間の理解を深め、文化、スポーツ、経済、科学技術等の協力を通じ、相互の繁栄に寄与することを目的とする任意団体です。趣旨をご理解の上、広く各位の入会を希望します。

会員数：277 人 (3 月 1 日現在)



マラウイ共和国 国旗



新駐日マラウイ大使着任



1 月 10 日、新駐日マラウイ大使として James John Chikago 氏 (写真：左) が着任した。新大使からマラウイ協会会員へ向けてのメッセージを賜ったので以下に全文を掲載する。

MESSAGE FROM MR. JAMES JOHN CHIKAGO AMBASSADOR-DESIGNATE OF THE REPUBLIC OF MALAWI TO THE MALAWI SOCIETY OF JAPAN

Allow me on behalf of His Excellency Dr. Bakili Muluzi, President of the Republic of Malawi and also current Chairperson of the Southern Africa Development Community (SADC), the government and people of the Republic of Malawi to express my heartfelt thanks and deep sense of appreciation for inviting me to contribute to "KWACHA BULLETIN" for the month of March 2002.

I arrived in Japan in the company of my wife Margaret and three children on transfer from South Africa on January 10th, 2002 where I served as Malawi's Ambassador for four years. Upon my arrival it was obvious that serving as Ambassador in this great country is indeed a singular life time honour and privilege.

You may wish to know that my mission unlike those of my predecessors is to promote trade, investments and tourism for my country. Malawi as a country which you know well became a democracy in 1994 with Dr. Bakili Muluzi as our first democratically elected President. President Dr. Bakili Muluzi and his government have a vision to alleviate poverty among the overwhelming majority in Malawi.

I salute the humble and honourable role the Malawi Society of Japan set for itself; that of acting as a forum for the dissemination of news on developments in Malawi. Allow me to congratulate the founders of this important organisation on their love for Malawi and its people.

To me the Malawi Society of Japan is the real Embassy of the Republic of Malawi. My job and that of my colleagues at the Embassy in Takanawa Kaisai Building is similar to that of maintenance teams. Our job is to feed you with information and you communicate to the wider community in Japan.

Having stayed and offered your distinguished services to the grass root community in my country, you will be the very first to agree with me on the challenges which came about from differences in cultural backgrounds and beliefs. You were able to see how cultures acted as a barrier to positive effort.

Of equal importance is the influence of cultural beliefs on trade, investment and tourism.

Any investor whether from Africa, Europe, Asia or Japan is risk averse. There is a saying in business which says, "foreign capital is shy and afraid of obvious risks." Indeed investors and tourists choose traditional markets and holiday destinations for assured safety.

My considered opinion is that apart from JICA volunteers who are honourable members of the Malawi Society of Japan, who else could go on holiday to Malawi with confidence on safety? Who else would know that Malawians are by nature friendly and helpful people? Who else would know that Malawi has its own sea port at Nacala in Mozambique and a dry port near the port of Dar-es-Salaam at Mbeya in Tanzania. Who else would know that Malawi is a strategic location for the manufacture of consumer goods for its extensive inland market in Sub-Saharan Africa. It is only through members of the Malawi Society of Japan; the selfless JICA volunteers who returned to Japan after offering their distinguished services to the ordinary people of Malawi.

While I await the honour and privilege of presenting the instruments of my Mission to His Majesty The Emperor, my mind is focussing on a strategy to be presented for discussion with the members of the Malawi Society of Japan at the appropriate time.

My President, His Excellency Dr. Bakili Muluzi, the first democratically elected President of the Republic of Malawi, his government and people of Malawi send their warm greetings to you all.

J. J. Chikago
Ambassador-Designate

Date: 12th February, 2002

【特別寄稿】

ロビ園芸適正技術普及プロジェクトについて

H3-1/ シニア隊員 奈良部辰雄

私は平成 13 年 12 月に 6 年間のシニア隊員任期（本来の任期は当然 2 年ですが、延長に延長を重ねた結果が 6 年です）を終え日本に帰国いたしました。KWACHA の紙面をお借りして、6 年間チームリーダーとして取り組んできた協力隊チーム派遣「ロビ園芸適正技術普及プロジェクト」について紹介させていただきます。

ロビ地区はデッサ州西部にあたり、首都リロングウェからは約 80 キロと比較的近いところに位置します。標高は 1100m から 1300m で、デッサ高原とリロングウェ平野の中間地点に位置していると言えます、比較的冷涼な気候です。マラウイに滞在された方には、リロングウェよりは冷涼でデッサよりは温暖なところといった表現がわかりやすいでしょう。

同地区はマラウイ政府から農村開発のモデル地区である Rural Growth Centre に指定されており、学校、郵便局、公民館、病院（Health Centre）、青空市場等の公共施設が整備されています。そして同地区を安定した農業生産面でのモデル地区とするべく、マラウイ政府農業灌漑省が日本側に協力隊員派遣の要請をあげてきたのが、同地区での協力隊派遣の始まりです。初代で派遣された野菜隊員は独自調査の結果、肥料等の資材不足や販売の強化には農民の組織化が不可避と判断、野菜の小規模な生産グループの結成に着手しました。

1991 年からチーム派遣が始まる 1998 年までは、シニア隊員 1 名、野菜隊員 2 名、土壌肥料隊員 1 名が派遣され、同地区における協力活動の方向性の模索、相手側の受け入れ体制の整備、農民の組織化と巡回指導、展示圃場や果樹園、果樹苗木生産場の整備等のチーム派遣を開始するための土台作りの期間だったと言えます。この時期とくに力を入れていたのが組織化された野菜生産グループの支援でした。野菜生産グループの支援が開始された 1992 年には 3 グループだったのが 2 年後には 15 グループ、それから 23 グループへと増加し、それらのグループを巡回し技術的アドバイスを与えたり、グループ運営に関する相談ののったり、展示圃場の拡張と展示栽培・デモンストレーションという活動が粘り強く展開されました。また月に 1 回グループのリーダーを対象とした集会を開催し、各グループの問題点、進捗状況報告、デモンストレーションを実施する形態が定着したのもこの時期です。こうして整備され、また管理の行き届いた展示・試験圃場・果樹園・ナーサリーや、試行錯誤しつつも実際に運営されている農民組織「ロビ園芸組合」等、目で見える実績は相手側の取り組みにも大きく影響しました。

そうした成果を受けて、マラウイ側はそれまでの活動の蓄積を踏まえた「協力隊チーム派遣」の要請を 1997 年にあげてきました。その結果、1998 年 11 月にはロビ地区内の

組織化された農民 1600 世帯の現金収入増加を上位目標、持続的な園芸生産量の増加をプロジェクト目標、適正園芸技術の発掘・形成、マーケティングの強化を期待される成果とする「ロビ園芸適正技術普及プロジェクト」が開始されました。その活動を大まかに言えば以下ようになります。

野菜・果樹に関する低コストで地域の有機物等を主に使用した肥培管理法や病虫害防除法の発掘・形成、品種の比較検討を目的とした試験活動

有望品種や栽培管理方法の巡回指導や展示栽培、講習会等を通じた普及

果樹園でのデモンストレーションと優良果樹苗木生産および植栽の促進

農民組織「ロビ園芸組合」の自立を促すための経営面や販売面での指導

以上の活動は野菜、果樹、土壌肥料、病虫害、シニアの各隊員と、配属先が配置した専属のカウンターパートが一体となって展開しています。意見の食い違いや方法の違い等でぶつかりあうこともありますが、日本側とマラウイ側が切磋琢磨しながら活動に取り組んでいます。

さてプロジェクトで普及または試験を行っている技術で紹介させていただきたいものがありますので、いくつかを説明します。野菜については最も重要なキャベツ、トマト、タマネギのロビ条件下での収量、生育特性等を調べており、それぞれの品種の特性が明らかになりつつあります。果樹については柑橘のマンダリンの品種比較を行い、初期生育の調査を行っています。試験結果は農民に紹介されることとなりますが、そうした結果に基づいて農民の方々の用途にあった品種選択を可能にすることを目的としています。



新聞社によるプロジェクト取材で野菜への有機物施用効果試験の説明

伝統農法や慣行農法は、現地農民の長年にわたる経験にもとづく知識と技術の蓄積の集大成であり、それらの技術は自然環境や社会・経済環境に適応した形で脈々と受け継がれております。そうした認識のもと、プロジェクトは開始された翌年に、園芸生産に係わる有用技術の農民への聞き取りを行いました。その結果、現地農民が有用と思う技術のリストが作成され、その中から特に効果が高いと思われるものを選定し、実証試験を行うとともに、普及活動に活かしています。

熱帯アフリカ原産のマメ科植物で *Tephrosia vogelii* と呼ばれる植物の抽出液はプロジェクト地域では伝統的に殺虫剤として使用されていましたが、病虫害隊員が中心となって葉カラシナ害虫への効果の検討を行った結果、市販の農薬（Malathion）

と同程度の効果が確認されました。プロジェクトの対象農民は農薬等を購入する資金が極めて不足しており、プロジェクトではそうした地域の植物を用いた低コスト防除法の発掘・形成、普及に取り組んでいます。

炭や燐炭の土壌改良材としての利用は日本において注目されていますが、プロジェクト地域においても草木灰や炭が伝統的に農業目的で利用されており、そこで、土壌肥料隊員が中心となってイネ科植物の茎から作った燐炭の育苗床土への混合効果をみる試験を行っており、トマト、タマネギ、葉カラシナへの初期生育への効果が確認されています。

中央アメリカ原産でキク科植物である *Tithonia diversifolia* はケニアの農民が緑肥として利用しており、同植物はプロジェクト地域にも帰化しております。その植物は野菜栽培で利用される内陸性湿地に雑草として自生しています。同植物は窒素およびリン酸を含んでいることが知られており、化成肥料の購入が困難な農民の小規模野菜生産には有用と考えられたため、直接普及を行っています。

アフリカや他の地域において行われている混作は、土地の効率的な利用と保険的な作付け体系としての有用性が一般的に指摘されているが、プロジェクトでは果樹と野菜の混作区を設け、マメ科植物緑肥の施用や殺虫剤としての散布を行い、圃場での展示を兼ねた観察試験も行っています。

以上、いくつかの技術を紹介させていただきましたが、既に農民の間で定着しつつある技術も少なくないことを報告させていただきます。

最後になりますが、任期を終了し、改めて思うことは、協力隊事務局、JICA マラウイ事務所の皆様のご理解とご支援を頂かなければプロジェクトの円滑な運営はありませんでしたし、現在までのプロジェクトの実績も残せませんでした。マラウイ事務所の皆様には公私にわたりご支援をいただき、6 年間の任期を無事に終了させていただきました。また一緒に活動をした隊員の皆さんはみな「現地の農民の人々のために尽くそう」という信念を持っているという感想を持ちました。生活面や業務面でいろいろな苦労を抱えながら、地道に活動してくれた隊員の方々にもこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

【レポート】

第 2 回 マラウイウォームハートプロジェクト完成

日本マラウイ協会では、マラウイ国内の地域発展と改善のために必要な草の根レベルでの協力活動で、資金不足であるが協力隊員の隊員支援経費を活用できないものを支援することを目的に、隊員からの要請に基づいて直接的な資金援助を行っている。

当プロジェクトの第 2 回目として、平成 11 年度 3 次隊 小野田公隊員（臨床検査技師）から 2001 年 7 月 26 日付で「ムランジェ・セカンダリースクール実験教室支援プロジェクト」の申請があった。当会では同年 8 月

22日、9月19日の第1、2回の合議審査の結果、不明点の照会や追加資料の請求などを申請者に行った。その回答をもって10月17日の定例会で合議審査した結果、申請案件を適正と認め、数原会長へ決裁を上申した。申請金額は245,296円。10月23日に数原会長の決裁を得て、翌24日に送金した。

プロジェクト申請理由・概要

申請者はマラウイ南部のムランジェ地区にあるムランジェ・ミッション病院で臨床検査技師として活動している。同地区には生徒数約400名のMulanje Mission Community Day Secondary Schoolという高校があり、そこではイギリス人ボランティア(VSO: Volunteer Service Overseas)が理科数科教師として活動している。申請者とVSOは地域の発展や互いの活動などで、たびたび意見交換を行ってきた。

申請者は自分の隊員活動を通じ、同国で蔓延しているエイズに関する知識を生徒や地域住民に伝える必要性や、不足している臨床検査技師を育成する環境整備の必要性を感じていた。一方、同VSOとの交流の中で、同校では理科の実験教室がなく、実験の授業は野外で行うか徒歩で1時間もかかる隣の学校の実験教室を借りて行っていること、同VSOが実験教室建設プロジェクトを立ち上げたものの、為替の大幅な変動で見積価格が跳ね上がり外壁用煉瓦を購入した段階で中断していることを知った。

申請者は、実験教室があれば理科・生物・化学教育の円滑な実施ができ、生徒の同分野への興味を促進して将来の臨床検査技師育成につながり、また、エイズ問題を生徒達に一層理解してもらおう場にも活用できると考えた。

よって、同VSOのプロジェクト継続に協力することにし、主材料費用、労務費、現地事務費等に必要な245,296円相当が申請された。なお、地元住民からも約65,000円相当の支援を取りつけられ、申請者はプロジェクト進行管理、地元・学校との調整等に当たった。工期は約3ヶ月。



完成した実験教室全景

工事の経緯概略

工事は昨年11月中旬に開始された。丁度、雨期にかかり進行が遅れると予想されたが順調に進み、昨年中に外壁の煉瓦を全て積み終えた。屋根張り、壁塗りを本年1月中旬に終え、最後の仕上げを2月の初旬に始め、同中旬に竣工した。

【小野田隊員の話】

工事を円滑に進めるために地域住民役員、学校代表教師、VSOボランティアと一緒に何回も会議を繰り返した。その結果、

工期内に終了させるために住民役員が建設に必要な材料を直接買いに行くなど、積極的にプロジェクトに取り組んでくれた。工事の経過を見るために週に2~3回、建設現場に通ったが工事の進行の速さに驚いた。また、工事終了直前にさらに資金が不足しそうであったが、住民の協力によって完成することができた。

会議を開く度に住民役員・学校代表教師から、日本マラウイ協会の援助があったので今回のプロジェクトを進行することができたことと感謝の言葉をもらい、実験教室を建設できたことを非常に喜んでいる。

生徒達は、早く新しい実験教室で授業を受けたいと望んでいる。また、VSOボランティアや教師達も授業の内容の幅が広がると、今後の授業プランの中で実験教室の積極的な活用を考えている。

活動任期が残り半年を過ぎてからの建設開始だったので、任期中にこのプロジェクトを完成できるかが心配であった。しかし、その心配とは裏腹に地域住民と学校関係者が一丸となって、このプロジェクトが上手く進行できるように努力してくれたおかげで工期内で完成することができた。このことから地域住民のこのプロジェクトに対する熱い思いが感じられた。この実験教室を生徒が利用し多くのことを学び、マラウイの発展のために役立って欲しいと願っている。



実験教室の前で生徒、教職員、VSOと

【ICA マラウイ事務所 村上博所長の話】

今回はウォーム・ハート・プロジェクトの2つ目の案件ですが、共通して言えることは、マラウイの人々の潜在能力が多く引き出されている点です。ふだん我々が当国の人々と仕事をする場合、計画通りに進めることは難しいですが、これらは正に自分達による、自分達のプロジェクトであることを十分に理解し、少ない予算、短い工期でありながらも地域の住民が中心となり、力を合わせることで予定通りに、しかも期待以上の仕上がりで完成できました。

今回も規模からすると小さな校舎一つのプロジェクトですが、これは地域の人々の自信とプライドの象徴であると共に、マラウイ、日本、イギリスが共同で建てたシンボリックな建物となるでしょう。小野田隊員、VSOのマルヴェジさん、そして何よりムランジェの人々に敬意を表したいと思います。

国際協力フェスティバル 2001

2001年10月6~7日にかけて東京・日比谷公園で「国際協力フェスティバル2001」が開かれた。これは外務省の協力で国際協力フェスティバル実行委員会が主催、国際協力事業団、国際協力銀行などが

共催で毎年開催されているもので、今回で11回目。日本マラウイ協会は、94年の初参加から8回連続の参加となった。



テントの様子

当日は割り当てられたテントに、マラウイ国内の写真パネルを展示し、マラウイを紹介した資料を配布すると共に、当協会編集の国情紹介誌「マラウイ The Warm Heart of Africa 第2版」や旅行ガイドブック「暖かきアフリカの心 - 湖とサバンナの大地へ」をはじめ、青年海外協力隊(JOCV)マラウイ派遣OB/OGが持ち帰った民芸品などの販売を行なった。

また、マラウイ風・揚げパンのマンガジ(マンガースとも呼ばれる)を実際にテント内で作り、マラウイ産紅茶・チョンペティーとセットで販売した。この企画は昨年に続き4回目、2日間で160セットの売上げがあり、出展テントを視察されたマンガラマ駐日マラウイ大使夫妻(当時)からも高い評価を得た。

今回の出展にあたり、当日の作業・運営に携わった人数は6日が13人、3日が11人と例年以上で、さらに、大使館職員がテント内でマラウイの紹介案内を務めるなど、駐日大使館の全面的な協力を得て、大きなPR効果を得ることができた。



駐日マラウイ大使夫妻(当時)と

マラウイOG、 帰国報告会で講演

2001年10月20日、2人のJOCVマラウイ派遣OGが、栃木県大田原市の国際医療福祉大学で帰国報告を行った。2人は草苺康子OG(平成9年度3次隊、村落開発普及員)と松浦綾子OG(平成10年度2次隊、保健婦)。報告会テーマは「発展途上国におけるプライマリーヘルスケアの実情(東アフリカ編)」。

この帰国報告会は、栃木県青年海外協力隊OB会と国際医療福祉大学が主催、国際協力事業団東京国際センターが共催し、栃木県国際交流協会の後援で、同大学の大学祭である「風花祭」の特別企画として行われたもの。日本マラウイ協会は、栃木県OB会から最近帰国した医療関連の活動

をした隊員 OB/OG の紹介依頼を受け、両 OG を紹介・協力したものを。



草苴 OG の講演

当日は、同大学の D108 教室に集まった約 50 人の学生・教職員を前に、草苴 OG は「アフリカの人々の暮らし」、松浦 OG は「アフリカでの医療活動について」と題して約 40 分づつ報告を行った。

草苴 OG は、マゴメロのコミュニティ開発訓練校でコミュニティ開発アシスタントと社会開発アシスタント(いずれもフィールドワーカー)のトレーニングコースで「社会調査法」を担当、また、「収入向上活動が女性および子供の福祉におよぼしたインパクト評価」等のため、自らマラウイ全国を廻った経験から、農漁村部の人たちの生活実態や HIV/AIDS・性病の予防や家族計画に関する教育・普及活動の実情などを報告した。

一方、松浦 OG はロビヘルスセンターでの保健婦としての活動から、マラウイの医



スライドを使って報告する松浦 OG

療事情全般、マラウイ人の病院に対する意識、乳児検診、AIDS や多い流行性疾患の実情などを報告するとともに、村のウィッチドクターや産婆の活動も紹介した。

集まった聴衆からは、AIDS 問題やマラウイ人の家族計画に対する意識などの質問が続き、普段聞くことができない途上国の医療事情に関心を寄せていた。日本マラウイ協会は今後も機会をとらえて、このような報告会に協力して行く予定である。



両 OG、大学教職員、OB 役員と

《日本マラウイ協会》 平成 13 年 8 月 ~ 平成 14 年 2 月 活動内容

第 2 回マラウイウォームハート プロジェクト

【8 月 ~ 2 月】(第 2 ~ 3 面の記事参照)

国際協力フェスティバル 2001 への参加

【10 月 6 ~ 7 日】(第 3 面の記事参照)

帰国報告会への協力

【10 月 20 日】(第 3 ~ 4 面の記事参照)

奈良部辰雄 OB 帰国報告会

【1 月 16 日】(第 2 面に記事あり)

ロビ園芸適正技術普及プロジェクトのチームリーダー、奈良部辰雄 OB (平成 3 年度 1 次隊およびシニア隊員) の帰国報告会を JOCV 広尾訓練研修センターにて開催。出席者の中から、延べ 10 年間に渡る隊員活動に対するねぎらいの言葉、沢山の質疑応答が取り交わされ、1 時間を超える熱のこもった報告会となった。

日本マラウイ協会情報

第 20 回通常総会のご案内

日本マラウイ協会は第 20 回通常総会を下記のとおり開催します。会員の皆様は本紙に同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

1. 日時 平成 14 年 5 月 12 日 (日) 15:00 ~ 17:00
2. 場所 青年海外協力隊広尾訓練研修センター 2 階大会議室

日本マラウイ協会の刊行物

チェワ語辞典 統合改訂版 (2000 年 7 月発行)
B5 版 186 ページ 1 部 1,500 円 (送料 310 円)
マラウイ旅行ガイド 新訂第 2 版 (97 年 7 月発行)「アフリカの暖かき心、湖とサバンナの大地へ」B5 版 108 ページ
1 部 1,200 円 (送料 310 円)

各書ご希望の方は、本ページ最後の入会方法の欄に記載の郵便振替口座または銀行口座宛に、代金および送料をお送りください。その際、郵便振替の場合は振替用紙の通信欄に必ず「xxxx xx 冊希望」と明記してください。銀行振込の場合は事前に必ず E-mail、あるいは電話/FAX で「xxxx xx 冊希望」と当会宛連絡してください。

ご意見、ご質問をどうぞ

日本マラウイ協会に対するご意見、ご要望、ご質問などありましたら、右記当協会宛へご遠慮なくお寄せください。また、電子メールによるマラウイ関連情報の配信も行っておりますので、電子メールアドレスをお持ちで、ご希望の方は、あわせてご連絡ください。

日本マラウイ協会 月次定例会

日本マラウイ協会では、毎月第 3 水曜日 18:30 ~ に、東京都

内 (通常は JOCV 広尾訓練研修センター 1F 研修室 2) で、月次定例会を開催し、マラウイ関連の支援活動などについての討議や、マラウイ関係者間の情報交換などを行っております。参加は会員でなくても構いません。初めての方も大歓迎です。詳しくは当協会までお問い合わせください。

日本マラウイ協会 入会方法

ご連絡いただければ入会申込書をお送りしますので、各項記入の上ご返送ください。E-Mail で入会希望の旨を連絡くださっても構いません。また、入会金と年会費の合計 (個人正会員の場合 1,000 円 + 3,000 円 = 4,000 円) を下記の銀行口座または郵便振替口座へお送りください。(郵便振替口座が安く便利です)

〒150-0012
東京都渋谷区広尾 4-2-24
青年海外協力協会気付 日本マラウイ協会
TEL: 03-3447-2921
FAX: 03-5798-4269
E-mail: japan-malawi@mc.newweb.ne.jp

UFJ 銀行 東恵比寿支店普通口座 255739
口座名義人 日本マラウイ協会 代表者 ト部敏男
(二ホンマラウイキョウカイ ダイヒョウシャ ウラベトシオ)
郵便振替 00190-7-13125
加入者名 日本マラウイ協会

また、協会規約その他についても上記宛お問い合わせください。